人権啓発コーナー

熊本県人権教育研究大会

第50回熊本県人権教育研究大会が山鹿市で開催されました。

この大会では、「部落問題の解決を柱とした人権確立の教育の実現を目指す」という目的で、子どもたちの暮らしに根ざした事実と実践で取り組んできた事を報告し、参加者と研究協議が行われます。

改めて幼児・児童生徒たちの置かれた状況を鑑み、生まれてきて良かった、生きてきて良かったと実現できる「人権のまち」づくりを推進していかねばならないと思いました。

12月は「人権月間」で、12月4日～10日までは「人権週間」です。

1人ひとりが幸せな毎日を送れるよう、互いに思いやりを持った気持ちで過ごしましょう。

子ども人権教室

人権学習「ねずみくんのきもち」では、相手を大切にし、思いやる気持ちを持っていじめのない生活を送ってほしい、という内容のDVDを鑑賞しました。

創作活動の万華鏡つくりでは、鏡の組み合わせで作り出す不思議な模様つくりにトライしました。

▲どんな模様が見えるかな？

人権啓発動画

テーマ　差別をなくし誰もが輝く人権のまちに

日時　12月9日㈮13時30分～

場所　文化センター

問　生涯学習課

☎0965-52-5860

八火図書館だより

寒さも少しずつ厳しくなり、本格的な冬の訪れを感じられる頃となりました。今年も残り1か月。風邪などひかないよう、手洗い・うがいをしっかりと行い、楽しい年末年始を迎えましょう。

来年も皆さんに素晴らしい本との出会いがあることを願っています。

新着図書紹介

一般書

ハヤブサ消防団　池井戸　潤

マル暴ディーヴァ　今野　敏

喫茶とまり木で待ち合わせ　沖田　円

血流ゼロトレ　堀江　昭佳・石村　友見

児童書

モモンガのはいたつやさん　もりのいたずらっこ　ふくざわ　ゆみこ

ごめんねゆきのバス　むらかみ　さおり

にんにんにんじゃ　浦中　こういち

かずもう　もとした　いずみ

今月のひと～山脇百合子～

山脇百合子は、東京生まれの絵本作家・画家です。実姉の中川李枝子とのコンビで「ぐりとぐら」シリーズや「そらいろのたね」など、多数の作品を手がけました。「ぐりとぐら」は海外にも翻訳され、親子2代で今も広く愛され続ける作品です。

おすすめ図書

ぐりとぐらのおきゃくさま

作・中川李枝子　絵・山脇百合子

ぐりとぐらが、雪の降り積もったところに大きな足跡を見つけ、それを追っていくと気がつけば自分たちの家に…。誰だろう誰だろう、とページが進み、もちろん子どもの期待通りの人物が登場!!ぐりとぐらのクリスマスの絵本です。

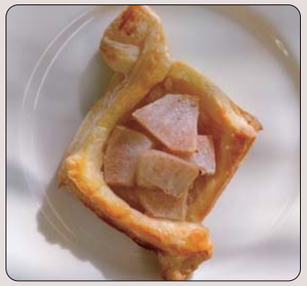
問　八火図書館

☎0965-62-3489

地域おこし協力隊　活動レポート㉔

▲竜北中の起業体験で商品として出される梨パイと梨ピスを、3年生と一緒に作りました。

▲10月の料理教室では、サンマの香味蒸し、梨パイ、ヤムニョムキノコを作りました。



▲梨パイは、氷川町産の梨ジャムと生梨をのせ、クロス折りで焼き上げました。

▲インスタグラム

料理教室～冬野菜の特別料理～

日　時	令和5年1月28日㈯　①10時～、②13時30分～（各定員10人）
場　所	氷川町公民館　調理室　　参加費　500円（当日徴収）
申込期限	令和5年1月20日㈮までに電話で申込み
持参物	エプロン、三角巾、マスク、タオル、保冷バッグ、水筒
申込先	地域おこし協力隊　蜂須（農業振興課内）　☎0965-52-5854

町民文芸

投稿先：〒869-4814　氷川町島地642番地
企画財政課宛（毎月5日必着）

短歌

冠のコマユミ紅く色づけり
竜峰山のは緑のまゝに
西上宮　村内　一誠

北風に朝日の吐息流れ込み
氷川の水はあえかなる朱
北野津　井田　道寛

つやつやの白玉だんご茹で上げて
黒砂糖まぶす父の命日
西野津　古崎　スエノ

剪定し樹木の枝ごし秋日和
染める夕陽の輝かし
西野津　古崎　栄子

爽やかな秋の空気を吸いながら
今日の一日の無事を祈らむ
吉　本　髙橋　澄子

俳句

コマユミの紅く色づく秋の庭
西上宮　村内　一誠

曲線の影ゆたかなり寒卵
北野津　井田　道寛

ハローイン杖は紫とがり帽
西野津　古崎　スエノ

命日の庭花摘むや冬に入り
西野津　古崎　栄子

木犀の香り浴びつゝ深呼吸
吉　本　髙橋　澄子

「雪国」VS「山の音」

法道寺　本田　花風

「山の音」の論評の一つ、「作品成立から約三十年経った今日、『山の音』を対象とした論文は多い。戦後の川端文学の代表作と目される『山の音』への言及を欠いては、どのような康成論も成り立たないと言っても、恐らく過言ではなかろう。そして『山の音』に触れるほとんどすべての論者が、信吾の菊子への感情に着目している。信吾と菊子の人間形成と両者の関係の分析は、『山の音』論の大きな課題であろう。」とある。ふたりの感情の内実を探り、その「愛」の様相を明らかにできるかが課題である。

信吾と妻、息子夫婦、出戻りの娘と幼子二人の七人の尾形家が鎌倉に暮す家族である。妻の保子の姉にあたる美しい人にあこがれていた。その人は結婚して後死んだのであるが、その美しいイメージがいつまでも信吾の胸に残っており、彼は現在の妻に不満があるわけではないが、充たされなかった恋の不満がいつまでも心の中に残っている。そんな家族の様子を信吾の眼を通し物語は坦々と綴られる。

信吾は自分の生を振り返り、満たされずに終わった美しい姉（亡くなっている妻の姉）への憧れを物語の随所で思い起こし、息子の嫁への思慕が全編に盛りこめられている。